

香港の語学事情

今井 七重

香港では英語が日常で、ほとんどの人が流暢な英語を操るものだと思っていたのですが、現実はかなり違っていました。そしてその裏には、色々と複雑な教育事情が背景にありました。街中で聞こえるのは、英語よりも圧倒的に広東語です。地元のスーパーでは、まず広東語で話し掛けられ、キョトンと

していると、ようやく片言の英語でコミュニケーションがはじまるといった具合です。ほとんどの店員は、数字を英語でいうことや「キャッシュ、オア、チャージ」などという最小限の英語は使えますが、それ以上話が複雑になると、立ち往生する人が多くなるのも現状です。もっとも普通に買い物する

ぶんには、片言の下手な英語で十分なわけで、こちらの日本人の間では、冗談ほく、「殿方の流暢な英語よりも、奥様方のたどたどしい英語の方が却って通じる」といわれる程です。

香港で、なんらかの語学を習得したいと思つたら、やはり実戦と言う点で、英語よりも広東語になります。返還後、香港では北京語の授業時間が義務づけられましたし、よりよい就職先を求めて、北京語をならう香港人も多くなりました。政府系の一部では、すでに電話の応答が北京語で行われていますし、銀行のテレフォン・バンキングでは、最初に北京語、広東語、英語の三つの録音テープが流れてきて、返還前より時間がかかるようになりました。

ところで、北京語、広東語は、同じ中国語なので習得は楽なのではないかと考えますが、実際は、発音がまるで違うし、文法も異なるので、仮に聞き取

りは出来ても、香港人には正しい発音、正しい文法で話すのは難しいそうです。つまり全く別の語学を学習するのと同じ感覚です。

さて、香港の中学校の約三十パーセントは、中国語（主に広東語）で授業をしている中文中学で、残りは全て英文中学、もしくは中英二カ国語で授業を行う中英文中学です。これらの学校では、国語や中国史の授業は中国語で行いますが、数学や理科などは英語で書かれた教科書を使い、テストの答案も英語で書きます。ただし、先生も生徒も香港人なので、授業はもっぱら広東語で説明するという、まだるっこさがありますが、日本との比較でいえば、英語に対する絶対量に違いがあります。又英語が将来お金につながるという現実があるので、英語に対する真剣度が違います。「有名大学に入れば、将来安定」という、日本の進学熱に通じる部分が、香港の英語熱に当たるほどです。

向上心の強い人たちは、ここで猛然と英語に励み、アメリカ資本の企業、香港資本の大企業へ華々しく就職、香港の大手町にあたるセントラル等で働きます。一方、英語になじめなかった人たちは、私りが日常買い物するテリトリーで仕事をするわけです。私が、意外と英語が通じないと思ったのは地域的なもの及び、職種のせいだったようです。しかし、片言とはいえ、ほとんどの人が英語を話せるし、外国人から話しかけられてもたじろがないのは、教育形態及び日常少しでも英語を使う機会があるからだと思われまます。

一九九七年の返還で、政府はこの教育制度を変え、この九月から、香港中の中学一年生に対する北京語教育を前面に出してきました。しかし、その一方で、一〇〇の中学校に従来同様の英語での教育を認可しました。この結果、小学六年生の五人のうち一人が英語中学に通えることになりました。

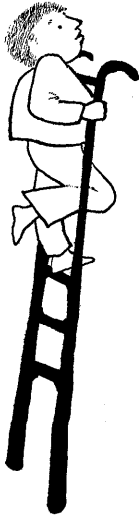
一〇〇校のリストが公表されると、対象外の学校から、選定方法に問題ありとクレームがついたりと波紋を呼びましたが、一番の問題は、そこから派生する、当事者およびその親たちの悲劇です。将来を約束される英語力を我が子につけさせたい、そのためにも母国語ではなく、英語を重視する選ばれたブランド校一〇〇校に通わせたい……。熾烈な戦いが始まるわけです。同じようなことは、どの国にもありますが、中国になった香港で、英語が上達しないことを悔やみ、そのために有名校に入れないことを後悔する、英語で一喜一憂することがあるというのは、皮肉な事です。

英語教育については、昨今、日本でも検討されているようですが、香港の現状を垣間みて、明確な目的意識と実戦を伴うことの必要性を感じます。

これから香港は、旧正月を迎えます。来港以来、色々な祝日行事がありました。暦の上でお休みな

に、果たしてどういう内容のお休みなのか良く分からないものもありましたが、一番印象に残っているのは、九月十七日にあった仲秋節です。これは、日本のお月見とお盆を一緒にしたようなものです。十四世紀元朝の頃、朱元璋という漢人の指導者が、月餅の中に「仲秋の夜漢人は決起せよ」と書いたメッセージをいれ、漢人の家々に配り、元朝を亡ぼしたといわれます。この後仲秋の夜に月餅を食べるのが一般的になり、今でも九月にはいると月餅が街中で売られ、当日までなんだか町全体がそわそわした雰囲気になります。

甘いものには目がない私は、どこのお店の月餅を



買おうかな……と品定めをしていたのですが、長年香港に住んでいる日本人に「経験してみる必要はあるかもしれないけれど……」と暗に買うことを辞めるようにいわれましたが、理由は一口食べてみてわかりました。形は、日本の月餅に似ているのですが、中央に月に見立てたアヒルの卵が入っていて、その数が多いほど値がはり、直径八センチ程のものが、一個七〇〇円以上もします。味の方は、日本のそれとはかなり異なり、アヒルの卵のバサバサ感とあんこのねっとり感が、日本人好みとは言い難く、私も来年は遠慮したい気分でした。もっとも日本の月餅もこちらの人には、物足りないといって、うけ

ないようですから、お互い様といったところでしょうか。

当日は、香港人にまじって、お祭り気分で催し物が行われるヴィクトリア公園に勇んで出かけたのですが、香港の天気のみまぐれさを又しても思い知る結果となりました。それまで、雲一つない天気で、傘のことなど問題外だったのに、突如ポトポトきたかなと思うと、ダーツ。屋根などあるはずのない公園の中を、せめて大木の下にでもと大急ぎで走りまわりましたが、ほとんど意味がなく、びしょぬれになりました。「このまま帰るなんてつまらない、何も見ていないし、していかない」と不満をいう子どもを、早く帰らなければ風邪をひいてしまうとせかし、タクシーで帰りました。しかし、家に帰り着く頃には、雨は勢いがなくなり、あろうことか、シャワーを浴びたら、すっかり雨は上がっていました。仲秋節を楽しんだというより、仲秋節の日に、香港らしさを

別の意味で味わいました。さて、旧正月は、どんな展開になるのでしょうか。

四月に香港啓発空港に降り立って感じたのは、むっとする熱気と街全体から漂ってくる不快な匂いでした。どこもかしこも、異様な匂いがすると思っていた私ですが、今回、お正月を海外で過ごし、香港に戻ってきた時、あれほど嫌だと思っていた匂いなのに、なぜか懐かしく感じている自分に驚きました。

うまく、表現できませんが、香港の魅力に、知らず知らずのうちに、ひきこまれていくのかもしれない。残り、一年、感じてみます。

— 終 —

(元幼稚園児の母・香港在住)